

国語教育法の実践的研究

——中等国語科教育の進展に対応する一つの試み——

酒 井 為 久

I はじめにあたって

本研究課題に対して、文部省から昭和47年度科学研究費補助金(奨励研究B)の交付を受けた。本稿は、その研究の一部分である。

研究のねらいは、歴史の浅い中等国語科教育が、主として、高校への進学者がふえ後期中等教育が準義務教育化してきていること、新学習指導要領(中学・高校)の実施期にあることの二点で進展しており、それにつれて、一例として教師の発問とそれに対する生徒の応答の間のずれをみると、高校段階へかけて実に多様化しているというような、新しく生じてきた混乱に対応することである。そのため、中学・高校の国語の授業のなかで見受けられるようになった、従前の国語教育観(初等国語科教育により比重を置いたものである)では律しきれなくなってきた事柄〔「現代国語」系列の教材内容に沿う適切な発問・助言・指示・説明は何かが不明確であること、学習の動機づけと関連させた教育機器利用・ノートの扱いなど効率的な授業の展開を考える必要があること、国語国字問題としても重要な敬語の問題や漢字の指導など訓練的な面を見直すこと、主観的になりやすい詩歌の読みを個別指導を活かした形で一般化すること、これまで入試対策的であった古典教育からの転換が要請されていること、等々〕を中心にして、研究を深め、実践に沿った(中等)国語(科)教育法を組み立ててみようと考えたのである。

その試みとしては、従来からの教材内容に重きを置いた研究法に加えて、これまで高校ではあまり問題にされなかった実際に教える際の方法的な面をも考慮して考察を進めなければならないのだが、そうした国語教育の専門的な研究が少ないこと、とくに高校段階を中心にした中等国語科教育研究にあって、それが目立つことに気づくのである。その理由は、一つに、中等国語科教育研究の歴史の浅さに求めることができるが、他に、教材の内容をなしている国文学や国語学の研究に比較して、一般に、国語教育研究の意義が低く

考えられているところにあると思われる。確かに、国語の学習指導法の研修といった、いわば家計簿をつける段階の国語教育研究が国語教育研究とされ、経済学の勉強に相当するような国語教育の研究が多くない現状では、そう考えざるを得ないといえよう。

しかし、中等国語科教育が、専門化した国文学や国語学研究成果を使用して、一般の水準を高める唯一の普通教育の場であるとすれば、中等国語科教育研究が、専門化した国文学や国語学の研究成果を統合し、次代へ伝えていく際の、一つの軸になり得るかもしれないと思われ、そこに新しい大きな意義を見出すことができるのではないかと感じている。

II 古典(古文)教育論の構造

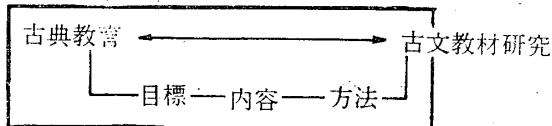
古典(古文)教育論が、国語教育の中の一部門として分離の様相を示してくるのは戦後のことであり、以前は国語教育論の中に融合していた。戦前には、国語文教育から古文教育へと自然な流れがあり、また、中等国語教育も今日のような広がりを見ない時代であった。古典を利用した教育の問題はあっても、現代文教育と位相を異にした形で、古典教育が問題にされたことはなかったといつてよからう。

戦後になり、現代かなづかい・当用漢字の下の国語教育の中で、次第に、古典教育は中等国語科教育を特徴づける一部門として、現代国語教育との距離を開きながら問題とされてきているが、全体に、国語教育論に附随した形で扱われており、古典教育論として分化成立しているとはいえない状況である。戦争直後、一時極端に排斥された古典も、徐々に、高校教育を中心に隆盛に向い「古典」に関する科目の成立を経て、今日に至っているのだが、その間の古典教育論を集積するとどんなことがいえるかという興味と必要性を次のことから感じるのである。

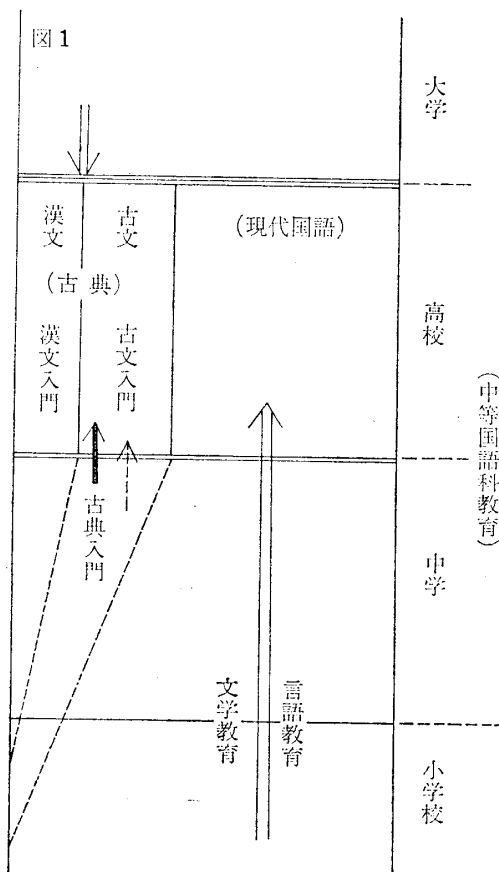
その理由は、昭和48年度から実施される新学習指導要領によって古典の必修単位数が減らされていること、大学入試問題から古典の出題がされなくなる傾向が目立ってきたこと、の二点から、古典教育の危機感

や在り方検討の気運が高まっている現在、その解決が多く古典教育者の意識改革に求められ、中には、個人の経験から出た古典教育論が述べられたりしているが、それらが具体性を欠いたり、一般性に欠けていたりして、問題の解決には及ばないと思われるからである。そこで、その為の有効な方法として、戦後の古典（古文）教育論を検討し、その構造を確かめようと考えたのである。

戦後の古典教育論を調べてみて、気のつくことは、その数が少く、本格的なものはあまりないということであった。その範囲を、古文教材の学習指導の研究というところまで拡大すれば、その数は非常に多数に上ると思われるのだが、古典教育論を次の実線内の範囲で、古典教育の目標・内容・方法を見通したものに限定しておく。



以下、その代表的なものを選んで記述していくのであるが、頁数を示したのは、1冊の書物や雑誌等の中の一部であることを強調したのである。また、それらの古典教育論を読み進んでみると、論の中心をなす部分はさほど多くなく、むしろ単純な形でまとめられたものが普通であることにも気づくのである。そこで、



その部分はそのまま抜き出しておくことにした。書き抜き終わってみると、それらすべてを素材として集積したものが、古典（古文）教育論の構造となると思われる、それがまた、高校の国語教育論の骨格をなしていくように考えられたのである。

図1に示したところは、現在の中等国語科教育の図式化であり、古典（古文）教育の位置付けを試みたものである。

1. 新教育と古典

国語教育辞典 東京堂 昭和25年12月

項目「古典」「古典読解法」4頁。

古典の定義として、一般的意味「古代の典籍」と歴史的意味「Classic の訳語」がある。古典の範囲は、江戸時代以前に限定するのが普通である。わが国には古典主義時代はないと考える。その特質は、『古典という語は、古+典よりなる複合語である。「古」には当然時間性・過去性を含むとともに、「典」に「典は経なり、典は常なり」という漢和辞書の規定のように、經常すなわち恒久性、不易性を持つ。すなわち、永遠にして不易なものが古典である。また「典」は、国学者のいうように「のる」（宣る）に通じ、法の意を持ち、また書冊を机上に置いた字形の象徴的意義から尊ぶ意味も生れている。すなわち、規範性・優秀性である Classic の語源ならびにその変遷も同様で、ローマの上流市民社会階級をさして呼ぶ名 *Classicus* がもつて、それが比喩的に「価値ある顕著な」の意に用いられたといわれるように、典型・模範性の意がある。この永遠不易性と模範優秀性とをあわせ持つところに古典の意義がある。』また、古典の現代性、近代性も重要である。

古典と教育について、『新制度の中学・高校教科書、大学の教育課程では、古典が大幅に制限され、代って外国文学・現代日本文学が多数を占めているが、これは、止むをえぬ現象である。また一般に古典にとりつかぬ青少年の多いことも事実である。しかし、与えられた古典教材に対しては、必要な資料を用意した上で十分検討を試み立ち向かうことが教授者にも学習者にも要請される。』

久松潜一氏の序には、『国語教育は国語の教育であるが、国語という中には種々の内容を含んで居る。これを学校の段階から見ると、小学校・中学校に於ては文字通りに国語の学習を中心におくべきであろうが、高等学校に於ては国語の学習とともに日本の文学や古典の学習ということが次第に重要な点となって来る。』とあり、編者白石大二氏等四氏の編集の方針には、『この辞典は、戦後の新しい国語教育の理解と学習指導の上に必要と思われる事項の解説、およびその実践のための国語・国文学の知識を総合的にまとめたもの』とある。

2. 新国語教育の出発

国語教育講座 第5巻 国語教育問題史

刀江書院 26年7月

石森延男 国語教育の回顧と展望 三

37頁。終戦まもなくからの6ケ年間の国語教育の変転を、文部省の関係者として回顧した内容は、現在貴重なものとなっている。ただし、古典教育に関しては「学習指導要領国語科編」(22年度試案)の作成の項で、中学校の文学部門の主眼点の一つとして、『古典偏重に陥らないこと、また、生徒の生活と興味に即して、読書のよろこびを与えること、精神のかてになるものを主とすることが大切である。』とあるだけである。

昭和22年、義務教育制の新制中学が発足したが、経験主義による言語生活中心の単元学習の導入に主力がそそがれたのは、小学校の新国語教育と同様であった。古典は戦時中の国粋主義への協調ということもあり、退けられていたし、文語文教育も影をひそめていった。しかし、昭和23年から発足した新制高校にあっては、戦前の旧制中学の国漢の伝統を相当に受け継ぎ、古文教育がその重要な位置を占めていたが、主に古典の現代性という観点から教材が制限され、縮小された形で新しく出発したのである。

3. 古典教育についての所感

言語教育と文学教育 ——実践と資料——

金子書房 27年9月

能勢朝次 古典と文学教育

5頁。『古典の中から、現代的感触のものを探り出すなどということは、はなはだ愚かなことであって、現代的なものを欲するならば、現代作品に求むべく、古典にこれを求めるなどは見当違いもはなはだしい。古典の中には、時代的傾向を超えた不易な人間性の真実を宿しているが、それは現代性というべきものではなく、古典の古典たるところは、むしろ現代が見失っている高貴なものを宿している点にある。』『古典教育において、第三に希望する点は、文学教育であっても、語学的基礎訓練をぜひ行いたいことである。それは、古典の原文に対して、親近感を抱かせ、恐怖感(むずかしいという感じ)を払拭するために必要であるからである。』『古典の文学教育を行うに当って、それがいかほどの功績を生徒の上に及ぼしたかという点については、さして神経過敏に考える必要はないと思う。文学教育の如きものは、生徒が興味をもってこれを迎えるに至れば、大体成功したものと判断して良いであろう。……世上往々に、古典教育をもって、受験用と心得ている傾向のところもあるが、それでも私は、さして咎めるには当たらないと思う。「つねに親しむ」ことが、古典教育では一番に必要なことであるか

らである。』というような所感を述べたものであるが、古文教材による文学教育であること、古典教育は受験用であるとされていること、の二点が注目される。

4. 学習指導要領(26年試案)の批判

国語教育実践講座 5巻 文学の学習指導

牧書店 28年8月

手崎政男 古典文学の指導

8頁。『古典文学の指導という技術論をとりあげる前に、どうしても出あう問題がある。それは、国語の教育課程の中で、古典の学習ということが、どのような意義をもち、またどのような位置をしめるかということである。なぜなら、戦後のいわゆる国語科の新しい動きは、かつての古典教育の克服またはその批判の上になつて、方向づけられているかに思われるふしがあるからである。』とされ、昭和26年改訂版学習指導要領へかけて、『古典の教育から解放せられるはずであった国語教育が、またふたたび古典教育へ復帰していく傾向が生まれ』ていることを批判し、いくつかの問題を取り上げている。

その一つとして、『学習指導要領は中学校第三学年に「古典入門」という単元例をかかげている。私はこのばあいとくに入門という語を附していることを奇異に思うものである……古典の学習はつぎの段階としての高等学校で本格的に展開せられるものであり、中学校はその予備的段階だという観念がはたらいているのであろうと想像される』

古典文学の指導が建前として一般化している様相を推定できると同時に、高校進学率が昭和30年3月に、51.5%であった時期の問題をよく表明している。また、「古典入門」と「古文入門」が未分化であった状態も推測されるのである。

5. 古典の価値

時枝誠記 国語教育の方法 習文社 29年4月

第八章 古典教育の意義

4頁。『今日、高等学校における古典教育は、上級学校の入学試験のために強制せられているといふのが実状ではないかと思ふ。上級学校よりの古典の出題も、はっきりした見識の上に立っての要求であるかということは、疑はしいので、多分に、専門家の立場からの独善的判断に基づくことが多いのではないかと思ふ。』『古典教育の意義は、むしろ、現代に無いものを求めるところにあるというべきである。……現代人は、尚古思想に対する反動として、現代的なものを、過去一切のものが克服された頂点であると考えてゐる。従って、過去のものに対しても、現代に通ずるものにしか価値を置こうとしない。』

『古典教育に対しては、従来、屢々感化主義がとられて来た。古典の持つ思想感情に触れさせて、そこか

ら、人間形成に資するものを汲みとらせることを、主として考へた。私は、それを、「惚れさせる教育」と呼んだのである。古典教育は、そのような惚れさせる教育であってはならないので、むしろ、民族の偽らぬ姿に触れさせることに目標がなければならないと考えてゐる。』

入試対策的古典教育は、古文の読解・解釈中心になり、文語文法の指導が重視されるのであり、戦前の

現代文 → 文語文 → 古文

といった段階的に国語教育が高められていく時期の指導法が適用できたのである。戦後、この時期までの古典教育論は、古典とは何か、古典の価値は何かを論じたものが目立ち、時枝博士のこの論などはその結論と受け取ることもできる。

6. 文学教育としての古典学習

文部省 中学校高等学校学習指導法国語科編

明治図書 29年7月

第三章 文学の学習指導

三 古典の学習はどのように指導したらよいか

3頁。『古典入門の学習指導については、各論第一章に述べたので、ここでは主として高等学校における指導について述べることにする。』『古典学習においては、語句の解釈よりも、さらに大事な仕事、日本人のものの見方、考え方、生き方を知ること、古典をとおして、文学鑑賞の力を伸ばすことなどが残っていることを忘れてはならない。そのためには、参考書や注釈書は、できるだけ、教室に持ちこませるべきであろうし、適切な注釈のついている資料を用いるのもよい。』

建前としては、古典教育は古文教材による文学教育であって、高校の国語教育において実施されるものである。そこから、古文入門といった段階が考えられるが、古典入門といった内容はとくに中学の国語教育で取り扱う事項とされるようになってきたのである。また、指導要領やその解説で古典を読んで、文学鑑賞まで及ぶと取り上げ強調している主旨は、それが実際に行なわれていない実状をふまえた上であることが多いということも注意しておきたいことだと考える。そして教材の範囲が古典文学に限られることも想定しているといえる。

7. 教師の意識の問題

大槻一夫 小中学校の文学教育

光風出版 29年9月

「文学教育は古典教育への復帰ではない」という一節。2頁。『戦後の国語教育がアメリカ直輸入の言語教育偏重の教育であるとし、今後は文学教育を盛んにしなければならないとする声の裏をさらに考えてみると、そこには過去の古典教育への郷愁が多分に含まれ

ているようである。』

教師の意識の変改がいかに困難であるか、教師の意識がいかに重大であるかといったことを暗示している文章である。

8. 古典入門について

国語学辞典 東京堂 30年8月

項目「古典」「古典教育」「古典入門」「古典文学」4頁。

古典は、古代の書物で典拠または規範とすべき書物という意味を持っている。古典という語の出典の説明と参考文献が示されている。古典教育については、『中学校までの古典教育では、……古典に親近感を持たせるようにすること、すなわち古典入門ともいうべき取扱が主要なねらいとなろう。……古典教育が本格的に取り上げられるのは高等学校においてであるが、そこでも古文の読解力そのものを養う点に、主要な目標があるのではない。』

国語教育辞典 朝倉書店 32年1月

項目「古典」「古典入門」2頁。

古典という語の出典と特性を記述した後に、古典入門として、『おもに中学校・高等学校のそれぞれの段階においての古典学習における入門期の指導のことを意味する。……中学校における高学年の「古典入門」の指導として、二つの行き方が考えられる。一つは、やがて原文に直接当たるための入門として、古文の解釈力をつけ、文語文法の初歩的なものを与えようとする行き方である。他の一つは古典の中の代表的なもの、そのエキスとなるものを、文法とか解釈の技術など顧慮せずに、原文にできるだけ豊富な注をつけるか、原文に現代語訳を添えるかして言語抵抗を少くして与えようとする行き方である。』

以上の二冊の辞典に見られるように、古典入門ということが、この頃を中心にして問題の中心となってきたということは、古典教育を推進する具体策として高く評価すべきことであると考えている。

9. 古文教材の例示

文部省 高等学校学習指導要領国語科編

昭和31年度改訂版 30年12月

国語（甲）の注(2)で、古文教材として次のものを例示している。

記紀歌謡、万葉集の長歌・短歌、古今集・新古今集・山家集・金槐集などの短歌、芭蕉・蕪村・一茶などの俳句、竹取物語・源氏物語・大鏡・平家物語・世間胸算用・雨月物語などの物語類、土佐日記・枕草子・更級日記・徒然草・奥の細道・玉かつまなどの日記・随筆・紀行類、謡曲・狂言・近松の浄瑠璃などの戯曲類、花伝書・三冊子・去来抄・源氏物語玉の小櫛などにある評論類、名家の語録類など。

以上のように例示されたのは、ここまでの古典教育の公約数的なものの具体的な集大成と考えられるが、弊害として、それらの古典文学中心の作品が必読作品と受け取られ、古典教育の程度が高くなるといった傾向があり、古文教材の例示はこの時だけにとどまるのである。

10. 大学入試問題の批判

言語生活 32年12月号 筑摩書房

特集 大学入試問題批判

野本秀雄 入試問題と古典教育

特集の部分、48頁の中、野本氏の分は7頁。

『高等学校における古典教育の目標と、入試問題との間にどんなギャップがあるだろうか。まず第一に言えることは、読解能力の求め方に食い違いのある点である。……多くの大学では、もとの中学生より読解力のないはずの今の高校生に、旧制の高校生と同じくらいの能力を要求している。……今の高等学校でも、古典を原文で読もうとするのは確かに一つの目標である。しかし、言うまでもなく、読めるようにする過程は同時に読みとることである。……もしも、学校では解釈技術を身につけ、それを将来社会に出てから本格的に古典を読むための準備にするのだけだけ考えたら、そこに一つの誤りがある。将来、古典に親しむようにするには、すでに学校の学習の中で、古典に対する抜きさしならぬ深い交わりも持たなければならない。そして生徒たちは、古典語の学習をしながらも、その作品に語られている喜びや悲しみをじかに感じとる能力をもっているし、また古典はそういう力をもっている。それを無視して、古典学習を解釈技術と文法練習に終らせ、古典を冷やかな外国語だと思わせるような学習に終らせがちな一つの大きな原因が、入試問題にあると言っても、あながちぬれぎぬを着せたことにはなるまい。』

古典教育の実態をふまえた意見であり、高校の現場からの発言を代表している。

11. 現代語訳の問題

言語生活 33年2月号 筑摩書房

古典と現代生活 (座談)

関係の部分は48頁。その中、「古典と現代生活」という座談会の部分が13頁。山本健吉氏が『古典の教養は一見無用でいて実は人生の基礎になるものなんですね。学生だけでなく今の教育者は、無用でありながらも有意義なものを与える気持がなくなって来ていませんか。古典的教養は無用中の無用なものだけれども。』と述べられ、古典を落ち着いて勉強できない風潮について話し合っている。

また、長野嘗一氏は「古典の現代語訳——その可能と限界——」11頁、で次のように述べられている。

『古典の口語訳が必要とされるには、次にあげる二つの条件がそろっていなければならない。その条件というのは、古典に対する世間の関心が高まっていること、にもかかわらず古文に対する理解力がすすんでいることの二つである。古来、古典の口語訳が大に行われた時期は三つあったと思う。第一は大正から昭和の初めにかけての時期。この期は円本の流行も一致する。第二は日支事変から大太平洋戦争に及ぶ時期。これはそう説明するまでもない。政府の音頭取りで西欧とことさら絶縁し、自国文化の優越性の誇示に寧日なかったのであるから、古典の口語訳が、文化遺産の再認識という美名を帯びて一役買われたことは、われわれの記憶にまだ新しい。が、戦争がはげしくなり、思想統制が進むにつれて、口語訳してよい古典と、してはいけない古典との差別が生ずるにいたった。第三は、戦後、昭和28年11月に初まる「現代語訳日本古典文学全集」(河出書房)を中心とする時期である。……もう一つ見落してはならないことは映画界が古典に食指をのばしはじめ、これらを巧みに再構成して出色の文芸映画を製作しはじめたことである。「羅生門」「西鶴一代女」「源氏物語」「平家物語」等がそれである。……こうしたことが原因となって、古典の現代語訳に対する一般の要望が高められていたのであろう。あの敗戦直後、路傍の石とうち捨てられてかえりみられなかった国文学古典は、十年に充たずして復興した。……このような一般の要望にもかかわらず、古典に対する読解力は眼に見えて落ちていた。漢字制限、新仮名づかい、それに学校教材における古典の激減、こうした文教政策は当然古典に対する読解力を低下させて、古典の現代語訳が求められる二条件が、ここに奇しくもそろったことになるわけである。……現代語訳の使命は、原作への接近欲を喚起することで、充分果たされたといつてよい。反対に無味乾燥な口語訳に失望して、原典への接近欲はおろか、日本の古典そのものへの軽蔑を誘うようでは、むしろ口語訳なぞなきにしかずというべきであろう。』

以前の映画、現在のテレビによる古典の一般への普及と学校における古典教育が直接に結びつかず、むしろ、学校では古典の本質に触れた勉強が出来ない風潮にあることを述べている。それは、高校の古典教育が原文としての古文を通して行なわれることになっているからである。

12. まとまりのある古典教育論

国語教育のための国語講座 第8巻 文学教育

朝倉書店 33年11月

遠藤嘉基 古典教育

56頁。「古典と教育」「古典とは何か」クラシックとということばについて、古典ということばについて、古

典とクラシックとの結合、日本の古典、「古典教育とは何か」古典教育の領域について、古典教育は何をめざすか、「古典教育にあたって」学校教育と古典教育、古典入門、高校の古典学習、おわりに。以上目次

『＜言語教育＞＜文学教育＞などと並べて、＜古典教育＞ということばが用いられるが、いつごろから使われ出したのか、今それを審らかにする余裕がない。しかし、現場では、今日でも＜古文の指導＞とはいうが、＜古典教育＞ということばはあまり用いない。＜古典教育＞というのは、むしろ＜教育者教育＞のための用語として理解されている、という。』

『クラシックを厳密に規定すると、ギリシア・ローマの作家・作品を、具体的にはきしていることになるが、二義的には、中世以降のものでも、クラシックの性格をそなえた一流作品は、これをクラシックと呼ぶことになったようである。そういうクラシックに、明治の初めごろ訳語としてあてられたのが、古典であった。池田亀鑑博士によれば、「英和字彙」（明治6年刊）に、「経典、古典、第一等記者」とあるのが最初らしい（『古典の読み方』6ページ）。』

次いで、山田孝雄氏「古事記講話」を引用して、古と典という字の語源的説明をしている。次いで、中国で用いられた古典ということば、後漢書と与王子雍書とにふれ、吉川幸次郎氏の解説を引いている。また、わが国で大平記巻二に古典という語が使用されていることを論考してある。そして「古きふみ」が古典という漢語に対する国語と考えられるとされている。『そこで、ある時代において一流と考えられ、後世に影響を与えた（クラシックの二義的なもの）と思われる作品を取りあげて古典というのが、今日一般のならわしになっているようである。』

『古典教育は大いに必要である。だからやりたいのだが、大学の入試がそれを妨げている、という声を聞くことはかなり久しいものである。では、それならば入試が無くなったなら、古典教育が行われるか、というと、少しばかり現場の実際を知っているわたくしとしては、はなはだ疑問をもつ。』

そして、「高校の古典学習」に必要なものとして、表記と音韻、語彙について、文法について、述べてあり、そのねらいは「解釈力（読解力と区別する）の養成にある」としている。また、適切な参考文献が添えられているのも特色あるところである。

戦後の古典（古文）教育論を検討してみると、その中から一編だけ最も代表的なものを選ぶとなれば、私はこの遠藤博士のものを推したいと考えている。古典教育は古文の解釈にあるとする見解は、現実肯定的であるが、この時期までの古典教育を総合的に把握した内容が支えとなっている。

13. 古典という語の出典

中等教育講座国語科編 好学社 35年3月

山岸徳平 国語学習における古典とその取扱 25頁。最初に古典の語義を、シナと日本と西洋から見ていくのであるが、シナでは、「典」を「物を書きしるした冊であり簡である」「法則・法規・法式などの意味や内容に用いるよう発展した」「典籍の意味にも用いる」ということである。それに「古」を加えるわけだが、その古さの限界は漠然として明確ではない。日本では、太平記巻二に古典が使用されているが、他の用例はほとんどないようである。『しかるに明治以後、西洋文化の伝来に影響せられて、この「古典」の語の内容が成長発展し、かつ一般に広く通用せられるありさまに、次第になって来ました。それは Classic が古典と翻訳せられ、Classic の持つ概念に、自然に影響せられるためでありました。』

次いでクラシックの語義とその内容が変化していく様子を詳細に説明している。そして、『日本人の漢詩文に関連するシナ人の作品も、当然、考えなければなりません。それは、漢詩文ということと同時に、東洋の古典としての観点から、考慮を払わねばならないのであります。』とされ、日本の古典の範囲は国文学の分野で考えられる一般的なところに落ち着くのである。

『今次の終戦後、従来の教育は、すっかり追い払われてアメリカ式に一変させられました。そのアメリカ式は、ジョンデューイ氏の説を基盤とした、いわゆる経験主義から出発していた。……その思想から、系統的な学習を、極端に排斥したのであります。』そうした経験学習に古典学習が押しつけられている現状ではあるが、中学にあっては通読教材として、高校では精読教材として、古典の解釈を国語学習の主要な部分として位置づける必要がある。『結局、古典を効果的に取り扱うのは、教授者が古典を知り、かつこれを愛し、その上に、学力や体験の豊富が、第一に重要であると強調するのであります。』

古典という語の出典、語義からの解説として最も詳しい論文である。科目「古典」成立の前夜らしい充実感に満ちている。

14. 科目「古典」の成立

文部省 高等学校学習指導要領 35年10月告示

古典甲の目標。(1)文化の享受や創造に資するため、古典の意義を理解させて、古典に親しむ態度を養う。(2)古典としての古文や漢文について、概観的な理解を得させ、読解し鑑賞する能力を養い、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。

古典乙Ⅱの目標のうち、(2)、古典としての古文を読解し鑑賞する能力を養い、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにするとともに、読解を通して、作品と

その時代や文化との関係などがわかるようにする。

当時は耳新しい科目「現代国語」の方が新しく成立したと一般には受け取られたが、今日から見ると、小・中では入門的にしか扱っていない古典に関する科目が、正式に高校において成立したと受け取る方が自然であると思われる。それまで、古文という用語とは別に「古典」という用語には価値的なものが背景に考えられていたのが、科目「古典」は即「古文」という結び付きが公式に認められたとする皮相な受け取りがなされる可能性もあった。昭和38年から学年進行で実施された「古典」科目の成立は、古典教育のそれまでの決算といえることができる。

15. 学習指導要領の展開

国文学 解釈と教材の研究 36年1月号臨時増刊
学燈社

特集 「古典」の理論と指導の実際——高校学習指導要領の改訂に伴って——

西尾実「古典教育の意義」1冊197頁の中の3頁。

『現代にあっては、戦前戦中の復活されていた国学的古典主義の否定として、また、国文学時代における意味での古典尊重も否定された。それは、国学が古典絶対主義であったとすれば、そのアンチテーゼとしての近代科学絶対主義ともいうべき立場から出発している。しかも、それはまた、国文学的古典尊重をも、一応無視して、新しい社会科学的観点から批判しようとしている。だから、現在は、わけても現在の教育では、そういう近代科学絶対主義の反動としての古典主義が頭をもたげようとしているが、もちろん、そういう反動としての古典主義ではなく、近代文化発見の根拠になっている古典のエネルギーを享受し、来るべき文化創造の資源としての古典のエネルギーを発掘するための古典教育の必要を自覚してきている。』

藤井信男「古典に関する科目と高校教育課程」6頁

『古典の学習は、主として読解である。したがって、国語科の学習活動を「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」とすれば、古典の学習は国語科全体の学習活動の一部にしかあたらないこととなる。また、国語科の学習活動を表現と理解とにあるとすれば、古典学習は理解の一部にすぎないこととなる。このように、古典学習の範囲は、狭いようにみえるが、その学習の対象は非常に広いもの、深いものである。』

石井庄司 「古典教育の方向(古文)」6頁。

『さて、今回の学習指導要領、古典甲、乙Ⅰ、乙Ⅱの各内容の(3)には「指導にあたっては、次の点を考慮する」として、やや方法的なことがでてくる。しかし、その大部分は、教科書というものでまってしまうことが多く、けっきょく、教科書編集者への注意と

いったものが多いことになる。』

宮崎健三 「古典乙Ⅰ・乙Ⅱにおける古文」7頁。

『31年度改訂の指導要領には、「古文」という語があるだけで、「古典」は用いられていない。「古文」という概念は、まず文章面に着目した概念であるのに対して、「古典」という概念は、文章面よりも作品としての質に着目した概念であって、価値観を前提にしたものである。今回の改訂について、「古典のほうはなんとかかなるが、現代国語のほうに実践上の問題がある」という発言が多いようだが、「なんとかかなる」というのは、それは従来の古文学習の安易性を容認する立場である。ある意味で「なんとかかなる」だけに、それだけ正しい古典学習の実践はむずかしいともいわなければならない。』

また、島田謹二・久保正彰「英米における古典教育」6頁、が参考となる。

今回の学習指導要領で、古典教育が占める位置の大きさを知ることができるのだが、実際の古典教育は旧態に近いものの継続となるであろうとの予測も成り立っていたのである。

16. 学習指導要領の解説

文部省 高等学校学習指導要領解説

国語編 36年4月 1冊142頁。

「古典甲」は、古典としての古文や漢文について平易に学習をさせ、古典に対する概観的な理解を得させるようにした。「古典乙Ⅰ」は、古典としての古文や漢文を系統的に学習させることをねらいとし、それぞれについて指導すべき事項と学習活動を明らかにし、指導計画を立てやすいようにした。「古典乙Ⅱ」は「古典乙Ⅰ」の学習を発展的に指導するものとし、「古典乙Ⅰ」を履修させた後に履修させることとした。履修か修得かという問題が派生している。

17. 学習指導要領の発展

新指導要領による高等学校国語教育実践講座

4. 古文の指導と実践 学燈社 37年3月

1冊336頁。内容を目次の大見出しで見ると、「古典(古文)指導の原理と方法」「古文学習の指導と実践」「古文指導の諸問題」である。

「古文指導の諸問題」のなかの「古典(古文)の学習指導の変遷」(渋谷宗光)は、『史的経過のおおまかな見方』を示しており参考になる。

しかし、全体として、この書物の程度までに学習指導要領に沿って、古文教育の意義を論究することが果してどれほどの意味があり、いかほどの成果を上げられるのか、疑問を感ずる次第である。学習指導要領の役割、および、古典教育の真の意義を考えるならば、古典とその教育実践とを正面から論究したいという感想をもった。

18. 教科書の問題

国文学 解釈と教材の研究 37年7月号 臨時増刊
学燈社

特集 新教科書から見た高校国語教育

宮崎健三「古典乙Ⅰ, 甲(古文)の展望と進路」6
頁。『今回出現した教科書群が、全体としてまずは無
難な姿で出て来たのは、指導要領が結果として無難な
教科書を予想しているように見えたからであろう。今
度こそは古文教育ではなく、古典教育の方向をはっき
りとうち出そう——という抱負が大きかっただけに、
いくらかの失望を感じることはおおいがたい。』

『古典入門指導の着眼点には二つある。その一は古
文入門であり、その二は古典入門である。古典は古文
で書かれているから、「古文」という形態について導
入する技術が必要である。それがその一の古文入門で
ある。さらに古典は内容として古典であるから、古典
の性格への導入がまた必要であるはずである。それが
その二の古典入門である。古典入門は即ち古文入門で
あると考えることは十分でない。ところが多くの教科
書は「古文入門」をうち出して、それですましている。
中には「古典入門」と銘うちながら、内容は古文入門
にすぎないものもある。内容としての古典について導
入しようとする意欲がきわめてうすいように見えるこ
とに不満を覚えた。』

新聞進一「高校用新教科書と古典」3頁。『旧来の
教科書のイメージがやはり残っていて、あえて冒険を
避ける気持ちもいくらか働いたであろうし、一方に大
学の入試ということが大きく高校の国語教育を支配し
ていて、その点の制約があったのではないかとも思わ
れる。また現実的に多くは単独編集でなく共同作業で
あり、ことに現場から来るいろいろなこえを反映し
て、折衷的にあれもこれも取り込んだのであろうとい
うことを考えられないでない。そこに最大公約数的な
要望にこたえうようなテキストが多く出て来たので
あろう。』

教材の問題、とくに教材精選の問題が取り扱われる
ようになったのは、古典教育論に具体性をもたせると
いう意味で大きな収穫であると考えられる。

19. 説明の一定化

国語教育辞典 学燈社 38年2月

項目「古典」「古典の意義」2頁。

「指導の要点」がまとめられていることに特色があ
る。古典の価値、古典の意義、古典教育の目標などに
ついての説明が、この辞典においてもそうであるが、
一定化してきているという印象がする。そして、古典
教育論の論旨は、古典教育の内容・方法の問題に重点
が移りつつあるようである。このことは、制度面にお
いて、科目「古典」が成立し、実施の段階に入ったこ

とと無関係ではない。

内容面で注目できるのは古文教材精選の問題であろ
う。また、方法面で注目できるのは古典入門期の指導
法の問題であろうと考える。

20. 改稿の眼目

時枝誠記 改稿国語教育の方法 有精堂 38年6月

第十章 国語教育における古典教育の意義

11頁。『(高等学校指導要領)のやうな古典観、古典
教育が打出されるに至るまでには、相当の紆余曲折が
認められるのである。……古典教育の場合は、必ずし
も、古典を独力で読みこなすことが出来る能力や、ま
た表現の技能を身につけることが要求されているわけ
ではない。ここでは、読まらるべき教材は、予め精選さ
れて、生徒に与えられるのである。そこに、「古典」
と「現代国語」の教育目標に、大きな相違が認められ
るのである。』

19の項で述べたように、高校における古典教育の落
ち着きを反映し、大学入試対策的でない古典教育への
期待も前項に述べたような具体性をもって感ぜられ始
めた雰囲気はただよっている。やや言語過程説の枠を
はずし、中等国語科教育の独自性を強調されたところ
が見受けられる。

21. 教科教育法のテキスト

三訂国語科教育法概論 有精堂 40年3月

第八章 四 古典としての古文の学習指導

5頁。『古典という概念は、高等学校の新しい指導
要領には「古典」を再び「古文」と「漢文」とに分っ
てあるように、主として古文ならびに漢文の読解の学
習において必要であるとすべきであると思われる。』

文学教育としての古典教育論が一步後退し、古典と
しての古文教育が前面に出た姿で、古典教育が一つの
座を占め始めた感がある。

22. 教科書教材について

文部省 高等学校国語科指導資料教材と指導法

41年3月

古典に関係ある部分約540頁。『昭和38年4月入学の
高等学校第一学年から、新しい学習指導要領に基づい
て指導が行なわれ、教科書も新しい学習指導要領に準
拠した検定済み教科書が刊行され、昭和40年度から全
学年がそれを使用することになる。したがって、各科
目の各教科書の内容となっている教材を概観し分析す
ることは、意義深いことといわなければならない。』

全教材について調査した、基礎的な労作。古典教育
の内容や方法に関連の深い教材に関心が向けられてき
た、傾向の一つの現われとも受け取られる。ただし、
教材と教育内容が直接結びつかないところに、他教科
と異なる問題点がある。

23. 中学校の古典指導

藤井信男 中学校国語科基本的事項の指導

明治図書 42年4月

八 3 古典教材の指導

6頁。古典教材の精選が中学校の古典指導では大切であるとの論旨。

元来、古典教育は上級学校の教育内容や、伝承していかねばならない言語文化の総量が先に定められており、下級学校の発達段階に即してそれを割り当てていくといった様相を呈していると理解できる面がある。従って、高校の古典教育が一応の軌道に乗った現在、中学の古典指導も落ち着きを示し始めたと考えられる。なお、この時(42年3月)の高校への進学率が74.7%となっていることも、中・高連絡の考えを定着させる要因となっている。

24. 小学校からの古典教育

国語教育の改造 1 本質と課題の検討 明治図書

43年7月

仲田庸幸 古典教育

13頁。『古典の現代化には、いろいろな問題がある。その中でも、古典の持つ間隔感をいかに除去するかということは、特に大きな問題ではないかと思われる。間隔には空間の間隔もあるが、古典の場合特に大きなのは時間的間隔である。それには、古典を現代に引き寄せる方法も考えられれば、古典の世界にさかのぼってゆく方法も考えられる。小・中・高等学校の児童・生徒の基礎能力や必要や興味に応じての原典の質の問題や、翻訳の方法等の問題もある。それらに一貫してたいせつなことは、間隔感を除去するに際していかに古典の生命をそのまま存続せしめるかということである。……前者は小学校や中学校の古典教育においてとるべき態度であり、後者は高等学校や大学における古典教育においてとるべき態度といえよう。』

初等教育から積み上げていく古典教育という観点からの見解である。これは、戦後の言語生活教育中心の行き方に、国民性の育成を加えていこうという風潮と無縁ではないが、論に述べられているように、これまで見てきた高校の古典教育とは別の問題であるとするのがよいと思う。

25. 古典教育の基礎

文部省 中学校学習指導要領 44年4月告示

古典について、基本的なものに適宜触れさせ、古典に対する関心をもたせることから、教材の中に古典を含めることとし、古典に対する関心を深め、古典として価値のある古文と漢文とを理解するための基礎を養うように改訂された。

47年度から実施された指導要領であって、中学校の古典教育は高校の古典としての古文教育の基礎である

との考え方が定着している。参考までに、47年3月の高校進学率は87.2%で、高校は準義務教育化しているのである。

26. 高校古典教育への疑問

国語通信 116号 筑摩書房 44年5月

特集 古典教育を考える

秋山虔 古典学習断想

4頁。『古典を現代にどう媒介させるか、あるいは継承するか、という設問。こういうまともすぎる設問に対して、私はそう性急にならないでほしいものだ、という気持をひそかにいさぐ。古典は現代からすると、どうにもならない距離の彼方にある。この距離はますます、そして急速に大きくなりつつある。現代における古典の功用をプラクティカルに考えてはならないので、むしろまずそのことを認識することのほうが、「古典と現代」という問題について、まともに立ちむかえるのではないかと思う。』

鈴木康之「文語文法に対しての疑問」4頁。『現在の古典の教育は、ほとんど、文学作品ばかりが扱われている。古典の教育が、文学作品の読解を軸にすることになれば、もちろん、いいかげんな解釈はゆるさされないはずである。いいかげんな解釈をしていて、文学を考えることなど、まったくナンセンスである。古典の教育が文学の教育として成り立たなければならぬということを考えてみても、文語文法の教育は、科学の教育として体系化されなければならない。』

大学入試における古文問題が、高校の教育課程を尊重する方向で改善されるようになり、制度面で古典に関する科目が成立し、高校の古典としての古文教育は一応の結論を見出しえたかに思われたが、科学技術教育振興の時代風潮の中にあって、古典教育内部から引用の見解に代表させうる疑問が表明されてきたのである。一つは、古典と現代の距離感が大きくなったこと。もう一つは、古典教育も文学教育である上に、語学的に見て科学の教育でなければならないこと。以上に要約できることである。

27. 古典指導の反省

国語展望 23 尚学図書 44年10月

尾形仂 古典教育の本質

6頁。『古典教育の本質は何か。改めてこう問いかげられた時、即座に満足な解答を与えうる教師はそう多くはあるまい。それは、今度の指導要領改訂の審議の過程で、古典を高校教育の必須科目からはずしてしまえという声が外のほうで出かかった時、国語科としての立場から、古典の必要性を力説する文案の作成を必死になって企てながら、ついにその完成を見ずにしまった実状からも推測できる。』

『古典の教育指導を、大学入試に出題されるいかなる古文をも読み解きうるような読解力の涵養一本に集中させる傾きを招きがちであったことは否定できない。いきおい古典指導は文法指導に傾き、極端な言いかたをすれば古典はあたかも文法教授のための教材であるかのごとき観をすら呈した。新指導要領における指導上の力点は、生徒が大学入試の際にか、あるいは大学生もしくは社会人となつてからか、ともかく将来古文に接する機会があるかも知れない時にそなえての読解力を涵養することよりも、……今目前の作品の心を正當に把握するための読解力を重視する。』

自明なこととして、外部から問題とされることがなかった古典教育が外部からも問題とされるようになったのは、戦後25年の教育の結果と経済成長による社会意識の変化が反映したものであるが、一方で、語学教育的古典教育が教育結果の評価も行ないやすい安易さから、引き続き行なわれていることに対する批判の気持も含まれていると思われる。そこで、古典教育の内部から真の古典教育の在り方を検討しなければならないという気運が起きてきたのが、この頃の特色である。

28. 古典の敬遠

国語展望 25 尚学図書 45年5月 巻頭言

1頁。『明年度の大学入試では、国語は、「現代国語」か「古典」か、一科目だけでもよいということが、文部省から発表された。すでに理科系の私立大学では、「国語」をはずしており、もちろん「古典」を課してはいない。東大でも、来年は「現代国語」を中心に出题するという趣旨のことが新聞に出ていた。……ともかく、傾向としては、大学入試から次第に「古典」は敬遠されていくようだ。……高校の先生がたの中には、大学入試を顧慮することなしに、伸び伸びと生徒に学習させる、そうした古典指導をむしろ待ち望んでいた先生が少なくないであろう。』

29. 古典の軽視

石井庄司 国語科教育法 誠文堂新光社 45年8月
「中学・高校における古典教育の目標」6頁。

『今日の中学校や高等学校で、なぜ古典を学習しなければならないか、その理由がわからないというのが現場の教師のがわにもあるということをきいた。なるほど、古典の学習は、今の中学や高校生にとっては、縁遠いものであり、また、学習するのに一だんとむずかしく、骨が折れて、そのわりに、得るところが少ないというのであろう。……それだからといって、このまま放っておいて、よいものであろうか。』

入試問題に古典が少なくなるようになり古典教育関係者の中にも古典を軽く見る見方が出てきた現在、古典教育を論ずる必要とその意義が強調されなければな

らないと思う。

30. 古典必修時間減少

文部省 高等学校学習指導要領 45年10月告示

48年度から学年進行によって実施される、新指導要領である。

古典Ⅰ甲の目標。(古典Ⅰ甲のみ必修となる)(1)古典の意義を理解し、古典に親しむ態度を養う。(2)古典としての古文と漢文の基本的な作品を読んで、古典を読解し鑑賞する基礎的な能力を養い、思考力、批判力を伸ばし、心情を豊かにする。(3)古典を読むことを通して、言語感覚を豊かにし、国語に対する愛情を育てる。

古典Ⅰ乙の目標のうち、(2)古典としての古文を読解し鑑賞する能力を養い、思考力、批判力を伸ばし、心情を豊かにするとともに、読むことを通して、作品と時代や文化との関係などがわかるようにする。

各教科にわたって必修時間の減少の方針に従って、古典の必修時間が、5から2となった。また、古典の作品というものを読むということ、古典によって言語感覚を豊かにすることが改訂された部分であるが、科目の名称の変更ほど内容は変化していないという印象をもつ。問題点は、必修時間の減少にあるという感じである。

31. 斜陽科目かという危機意識

東書高校通信国語 93号 東京書籍 46年1月

大平浩哉 魅力ある古典学習

3頁。『古典教育がこのように軽視されたしたのは、あながち社会の実利的な要求からくる無理解だけに原因があるのではない。長年にわたる、私たち古典教育担当者のマンネリからくる、ある意味での「古典」教育不在に大きな責任があったといえないだろうか。私たちが「現代国語」に比べて「古典」の授業はやりよいと安易に考えるとき、陥穽はすでにそこにあったのではなからうか。手なれたところで解釈や文法を中心とした授業を行なって、「古典」を教授したつもりになっていて、「古文」読解指導の枠の中から出ることを怠りがちであったところに、古典教育無用論をばびこらせたとはいえないだろうか。』

32. 古典教育の流れ

国語科通信 21号 角川書店 46年6月

座談会 古典教育の方向

松原博喜「旧制中学・新制高校における古典教材の変遷について」6頁。

『(明治末期から大正を経て昭和初期) 作品を時代に生きる作家との関連において見てゆくという、ごく基礎的な文学教育の作業も、古典に関しては最近まで国語教室において実現されなかったのではないか。ましてや作家が文学的に創造した作品の世界を、表現に

即しつつ統一体としてとらえ直す文学教育への道は、古典に関してははわしかったのである。……古典教育は、イデオロギー的教育の色彩を濃くしていったように見えるのである。』

新教科書採択への思惑をこめて、教科書関係各社の国語教育誌にも古典教育論が掲載されている。安易に行なわれてきていた古典教育を根底から考えなおそうとする論旨のものが多いが、教師の意識変改を求めるに急で、具体案を示した古典(古文)教育論が少ないといえる。教育は人なりということ、教師の古典教育に対する認識を変えるのが最も必要なことであるが、一面、それは変えにくいものであるということ、すでにこれまで見てきている。具体性のある古典教育論こそ説得力があり、それを目指そうとしているのである。

33. 史的研究の意味

東書高校通信国語 100号 東京書籍 46年9月

増淵恒吉 戦後の「国語科」の歩みと今後の課題 6頁。『教科書は、当初、文部省発行の「高等国語」を用いたが、昭和25年度からは、必修国語のみ検定教科書を採用することになり、選択国語(といってもほとんど古文のみ)や選択漢文は、無検定のもの自由用いることができたのである。…「国語(乙)」において使用する古文の教科書は、31年度まで、無検定のもの、自由に学校において採用していたのであるが、昭和32年度からは、「漢文」と同様、検定教科書を用いなければならなくなった。』

中等国語科教育が歴史的に研究されるようになったのは、それだけの進展があったからであるが、新しい方向(古典教育の在り方など)を見いだそうとする際に、教訓を伝統の中に求め生かしていこうと考えることの現われとすることもできる。

戦前の中等国語教育史をまとめられたものとしては、次のものがすぐれており、また唯一のものであろう。

田坂文穂「明治時代の国語科教育」 東洋館出版
昭和44年1月

田坂文穂「近代後期の国語科教育」 東洋館出版
昭和47年1月

田坂文穂「近代教科書とその出典」(自費)
昭和47年4月

34. 古典語の教育

鎌田正編 漢文教育の理論と指導 大修館書店
47年2月

水沢利忠 高校教育における古典について 16頁。『戦後教育を受けた教師が過半数に達したということである。戦前、戦中、戦後の古典教育が異質であったとしても、これに携ったのは異質の人ではな

かった。……古典教育が少年の心情や発想法に重大な影響を与えるものであるとすれば、一般的に戦前、戦中の少年と戦後の少年との間に、少なくとも古典についての認識に差がありはしないかという設定は許されて然るべきであろう。……いわゆる技術革新の今日、コンピューター時代における合理性、機能性、国際性と古典教育とのギャップである。さらに卑近に、テレビっ子、現代っ子、漫画、イラストの時代相と古典との不調和といってもよい。率直に、古典教育不要なりとする問題との対決である。』

とされ、ユネスコにおける古典に関する意見交換の解説や世界各国の古典教育の現状の説明ののち、『科学技術の革新と進歩の著しい今日、古典語教育に多くの時間を費す意義が那邊にあるかが明らかでなければ、翻訳教材による置き換えも考えられようし、今日の西欧に見られるように、普通教育にこれを省くことも考えられよう。』そして、『学校における一般教育が、過去の文化の成果としての知識や思想を与え、それを基盤としての自己啓発を指向するものである以上、その文化の伝達上必須の条件として、共通感覚を軽視することはできまい。』という意味で古典教育の意義を認められるのであるが、今日、人が教育を受けようとするのはなぜか、という教育の目的を確かめながら古典教育を考える必要があるとの、新しい視点を提供している。ここでは、古典教育と古典語教育が区別され論じられているように思われる。

35. 古典の学習指導

古典の教え方 物語・小説編<教え方双書>

右文書院 47年5月

総論の部分158頁。松隈義勇「学習指導要領の改訂と古典教育」16頁。『古典指導も現在多く見るような語釈・文法を主とする読ませ方であるかぎり、かなり高度な専門教育のような観がある。一部の特に必要とする生徒に限って学ばせるべきで、全員に必修させる必然性はないのではないか?。まことに痛い所を突かれた感じである。われわれは古典というものを国民的教養として学ばせたいと思っている。中学生・高校生に幅広く読ませたいと思っている。わかりよく、しみじみと読ませ、その生命にふれさせたいと願っている。ところが現実には言語抵抗があってどうにもならない。日常生活の中に文語文というものがほとんど消滅しているのだから、文語文というだけでも理解は容易でないのである。その上に大学入試が無視できない現実として立ちはだかっている。何をにおいても語学的読解力を付けることを要求される。』

『言語抵抗はどの程度、いかにして除くべきか。読みは何回ほど、どのような形で行なわせるか。内容理解に必要な知識はどの程度どう与えたらいいか。……

等々、限りもなくたくさん問題がわれらの前にある。(古典教育は)……どう活路を見出だしていったらいいか。』

野地潤家「中等古典教育の史的展開」32頁。『明治・大正・昭和(戦前・戦後)の各期を通じて、中等古典教育が国語教育の中でどのように歩んできたかを、その位置・役割・実際(内容・方法を含む。)という視点から考察していくことにしたい。』とされているが、主として制度的な面からの説明となっており参考となる。別に、授業の記録が多量掲載されているが、どのような意味があるのであろうか。

36. 高校国語教育の進展

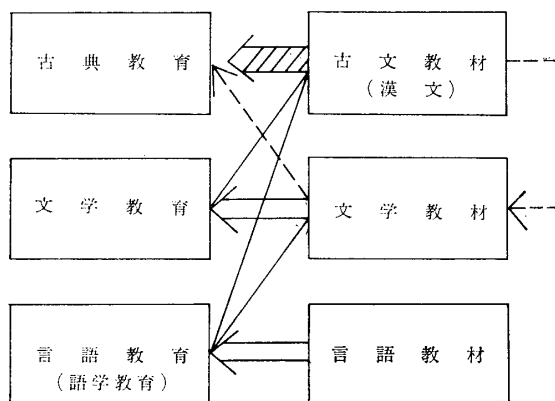
国文学 解釈と教材の研究 47年7月号 学燈社
大矢武師 学習指導要領から見た高等学校国語の変遷

6頁。高校の国語教育についても、こうした史的考察が可能となった意義は大きい。

【1. から 36. までのまとめ】

以上、1から36まで選抜した古典(古文)教育論を資料として掲げ、解説等を付してきた。そうしたことのねらいは、世に多く存する古典教育論が、それにたずさわっている教師各個の信念や教養を出所としているものが多く、広範な説得性をもちえないものが見受けられるので、正当な客観性を有する古典教育論はいかにあるべきかを考えた末、代表的と思われた古典教育論の資料の中からその論旨をなしている部分を選んで集積してみたのである。こうした資料を使う平凡な

図 2



研究の方法が国語教育研究にあってはあまり使用されないという現実をふまえた上のものである。

その結果として、以上のままですでに古典(古文)教育論の構造が示されていると考えるのであるが、それは教育研究にあつて独創による部分はさほど多くないということも、その間にあつて明確になったように思うからである。これらの古典教育論は、「古典」科目の成立告示を境界として、前半と後半に二大別することができるようである。前半は、主として古典の価値や意義が問題とされ、後半では、高校の教育課程の

中における古典が問題とされている。前半で注目すべきは、入門期の指導について論究されていることであり、後半では、教材の精選が考えられていることである。この二者は、古典教育の本質に迫る緒口となりうる考察点と思われるが、あまり深く掘り下げられているわけではない。前半と後半を通して、大学入試の影響もあり、古文の読解・解釈が古典教育の主流を形造っているのである。

また、図2に見るように、古文教材→文学教材→古典教育といった考え方が、古典教育は文学教育であるという建て前論として示されているのも特徴と思われる。それは、戦前の古典教育が国語教育の中に埋没していた頃の考え方が延長してきていると理解できることでもある。しかし、図2に見るような、古文教材→古典教育という、古典教育論が必要とされる現在、古文教材がもつ技能的意義からして、古典教育が語学教育へ直結するような傾向を示しやすいが、その間のずれを埋めるために、先の古典入門・教材の精選の問題あたりから授業における実践を深めていくのが大切であると判断することができた。その他の、適切な具体策は以上の検討からは見出せなかった。

図2の、文学教材→文学教育の関係は、両者に価値的なものが含まれており、その価値的なものをいかに扱うかということが論の中心をなしており、言語教育にあつてはそれ自身技能的な色彩を帯びているので、逆に、言語教材をどうするかという点に問題が生じてくるのである。ところで、初等国語科教育を特徴づけるのが言語教育であるとすれば、中等国語科教育を特徴づけるのは文学教育であり、とくに高校の国語教育にあつては古典教育がそうなのである。半面、中等国語科教育における言語教育は何かが不明確となってくるのであり、古典教育との関連を掘り下げることも必要となってくると考えている。

1. から 36. までの小見出しは、抜粋の部分だけでなく引用の資料全体の見出しになるように気を配った。私の古典(古文)教育論として筆を進めることになったなら、それらの小見出しがその骨格をなすはずだと考えている。そして、引用の資料を中心にし、授業実践の結果などを加え肉付けする予定にしている。

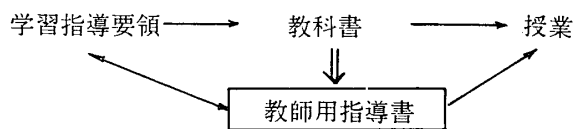
そうした際、授業実践を重んずるという名目で生徒に対するアンケート調査等の結果を尊重するのは如何なことであろうか。資料とするに足る古典教育論を調査・検討してみて、そうした生徒中心の論は色あせるのが早く、広い説得性を有しないという印象をもったのであり、むしろ、授業実践の中から多くの授業実践に共通するものを選抜する繰り返しの試みが貴重となるように思われた。それは、理論的な研究の場合も同様で、単なる思い付きの域から脱するための広般な基

盤をもつことがいかに大切であるかを痛感させられたのである。

さらに、古典教育論の検討の過程で、それらの読者のことに思いを馳せたのである。論の筆者以外の、多くの読者の眼に耐えうる論であるかどうかは、筆者の古典教育論に取り組む姿勢次第で決まるといって、平凡な感想をもったのである。

Ⅲ 中学国語の教師用指導書の検討

昭和47年度から、中学校は新指導要領のものと新教科書による授業が一斉に始った。国語科にあっては、6種18冊の新教科書が出そろい、新しいスタートが切られたのである。それらの教科書は、前年度の採択時に比較検討されて、それぞれ1種3冊ずつが各学校において採択されているのであるが、その教材を使った国語の授業はいかに展開されてきているであろうか。その一つの着眼点として、まず、それら各教科書の教師用指導書を検討してみようと考えたのである。そこには、その教科書の編修者による教科書の学習指導上の実際の姿が示されているはずだからである。それをそのまま授業で利用するかどうかということ、即ち、教師用指導書の使い方、読み方の問題は後に考察するとして、現実、次のような形で教師用指導書が介在し、その意味で国語教育に影響を与えているところが大きいのである。



さて、その新中学国語の教師用指導書をすべて以下に示しておこう。順序は、「昭和47年度使用教科書目録」に従っており、以下の文中では頭に付したA～Fの記号で代用することにした。

- A 日本書籍 中学国語の研究 1, 2, 3
 1. 446頁 1600円 2. 438頁 1700円
 3. 450頁 1800円
- B 東京書籍 新しい国語教師用指導書 1, 2, 3
 1. 560頁 1550円 2. 592頁 1500円
 3. 608頁 1550円
- C 学校図書 中学校国語一, 二, 三 学習指導資料
 一, 464頁 1600円 二, 484頁 1600円
 三, 536頁 1600円
- D 三省堂 中学校現代の国語最新版学習指導書 1,
 2, 3
 1. 371頁 1700円 別冊文法指導資料 205頁
 2. 365頁 1200円 3. 420頁 1200円
- E 教育出版 新版標準中学国語一, 二, 三教師用指導書
 一, 568頁 1900円 二, 568頁 1900円

三, 568頁 1900円

F 光村図書 中等新国語教師用指導書 1, 2, 3

1. 568頁 1500円 2. 592頁 1500円

3. 602頁 1500円

以上のうち、Dは、ルーズリーフ様式であり、Fは各学年とも上下二冊となっているのが特色である。次いで、その検討を始めてみたい。

1. 中学1年の指導書の構成

Aは、総説で編集の意図や各領域における教材の特色と系統を明らかにし、年間計画の資料を提供している。各説は、学習指導の計画と教材の研究に分けられている。付録は、公開研究授業指導案例、漢字の使用状況、語句・注の一覧表である。Bは、総説と単元ごとの解説と教材ごとの解説と付録とで成っている。付録は、当用漢字提出一覧表、単元別評価テストの実例、補充教材である。

Cは、教科書の編集趣旨を明確にすること、および指導の研究と教材の研究の資料を提供する方針から、総説、単元の解説、教材の指導としての指導の研究と教材の研究、評価とに分けられている。そして、別添として、テスト例集と補充教材集がある。Dは、教科書編集の基盤となったものを別冊でまとめており、他に、文法指導資料を別冊で添えている。本書は、単元の構成と展開、学習指導の研究、練習の解説、テスト問題例と解答から成り、年間指導計画表が別表としてついている。

Eは、総説編と指導編と付録とに分けられており、指導編は、単元の解説、教材の研究、学習の手びきの解説、ことばの学習の解説、評価、練習問題とに分けられている。付録は、中学校学習指導要領(国語)、国語科におけるOHPの効果的な利用、注意すべき重要な語句一覧表、教材用フォノシートである。Fは、指導書別冊「総説編」があり、本書は教科書の単元ごとの一まとめとし、単元の計画、単元の解説、学習指導の研究に分けられ、学習指導の研究は教材の研究と指導の研究と評価の研究とに分けられている。

各書はそれぞれの方針の下に工夫され、構成されているがその主要なもので各書に共通するところをまとめると次のようになっている。

- (ア) 総説……教科書編修の意図方針等の説明
- (イ) 中学校3年間における国語科の学習指導計画
- (ウ) 単元の解説
- (エ) 年間指導計画の一覧表
- (カ) 教材の研究
- (キ) 指導の研究
- (ク) 評価の研究
- (ケ) 付録

以上のうち、中心となっているのは(カ)教材の研究で

あるが、この部分の扱いは各書に共通するところが多く、各書の特色がこの部分ででていいるとは考えがたいのである。教材の相違はあるものの、教材の研究方法には差がないからである。(ア)の総説と(イ)の3年間にわたる学習指導計画の部分は、教科書の特色の差を反映しているが、解説の方向は学習指導要領の具体化という点で一致しており、教科書教材として何を取り上げるかによって各書の特色がでていいると解すべきであろう。そのように考えると、各指導書の特色は、(ウ)(ク)(カ)(キ)(ク)の部分にでていいると思われるが、(ク)の付録は参考資料であるとして除外すれば、残りは量として多くない部分になるのである。

さて、(ウ)単元の解説と(ク)年間指導計画とは教科書に沿っており、(カ)指導の研究と(キ)評価の研究とは生徒の実態を想定した上で書かれていいるという点で対照的なところである。これらの部分が、中学1年の指導書の各社のものの特色をよく表わしていいる個所といえるのであるが、それらを(ウ)教材の研究との対比において見た場合、どんなことがいえるであろうか。まず、教師自身の研究活動とその成果を使用しての生徒の学習活動への働きかけの研究とに区別することができよう。後者は教科書に沿った研究と生徒の実態に即した研究とに分類できそうである。指導書は、教師自身の研究活動を補助する意味で(ウ)教材研究が資料として量的には最も多く載せられていいるのであるが、それらは断片的・表面的に羅列されていいるという印象を与えがちで

ある。また、教科書に沿った研究の部分(ウ)(ク)は当事者の筆になるものだけに他の及ぶことのできない生彩を放つていいるということができよう。

残る部分である(ウ)(ク)の生徒の実態に即した研究の扱いはどのようなであろうか。問題を多く含んでいいると思われるのである。この点を明確にしていいる、Cでは指導目標、教材観、指導の展開(例)、指導上の着眼点、学習のてびき・練習の項目があり、Fでは指導の目標、指導の方法、指導の展開例、指導上の注意の項目があり、ともに評価の観点、方法を付していいる。見方によっては、教材研究が教材の細分化を目指すとするれば、指導研究はそれらの統合化を目指すといえるのであるが、そこまで徹底した記述になっておらず経験的な処理方法を述べることになりがちのようである。その一因は、教材内容と生徒の実態の兼ね合いをねらう指導研究ということで教材内容に徹した指導研究が行なわれにくいからである。生徒の実態に重きを置いた指導研究は(キ)評価の研究だとし、授業の過程や事後処理の段階で主としてなされる研究であるというように、割り切つて考えるのは如何であろうかと思われるのである。しかして、指導書はより多く授業の事前研究に属する内容で構成されていいる様を指摘できるのである。

この項は未完であり、以下続稿の予定である。

48. 1. 15記